

「吉備津の釜」の「慳（かだま）しき性」に関する一考察

中 田 妙 葉

『雨月物語』において「性」^{さが}は、登場人物の人間認識の方法であり、物語の展開の鍵となる重要な要素である。「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の姪」「青頭巾」は登場人物それぞれの「性」が誘因となって問題を起こし、悲劇をもたらすことを、克明に描き出す。

—

中村博保氏は『雨月物語評釈』の中で、秋成における「性」について次のように言っている。

秋成においては、「性」^{さが}は善にも悪にも、規範にも重ならない自然の原型を示す言葉として用いられており、個人以前の先験的な所与として、むしろ人間の現実を規制する自然として自覚されていた。『雨夜物語たみことば』には「性はうまれつきたるくせをいひ」と記されており…（中略）…つまり、「性」は状況の変化にかわりなく変わらぬ実体であったと同時に、むしろ状況によってその本質も露呈されるものと考えられており、個体（性）とその環境（状況）は、人間の自然を構成する二つの分極として構想されていた。…（中略）

…この物語は、人間の情念や執念を抽象し、亡霊として現形させる「性」の不思議に小説的テーマをおき、性と状況との葛藤によって構成されていたといふことができる⁽¹⁾。

また、「性^{さが}」を「人間内部の固有な自然と見る」のは「秋成独自の思想であった」とし、秋成は「性」という言葉を、「今日いう性格と、性格以前の潜在的で固有なものという二通りのニュアンスで用いている」とも言っている⁽²⁾。

さらに長島弘明氏は、『雨月物語』の「性」は人間として普遍的なものではなく、男の「性」、女の「性」それぞれ別のもので扱われていることを指摘する。

『雨月物語』が、人間の本源的・普遍的な「性」を目指し、現実の階層や職種の別を基準とした分類を無化しようとしているといっても、そこには自ずとある限界がある。…男・女という区別が、近世期においても、もつとも強力な線引きであり、無化することの困難な分類であったことは、言うまでもない⁽³⁾。

秋成にとって人間共通の「性」という認識はなく、あくまでも男と女それぞれ異なる「性」を持っているという認識であることは、『雨月物語』には明白に示されている。

まずは、『雨月物語』の中でどのように「性」が表現されているか見ていきたい。全九作品中、「性」という言葉を使って表現している箇所は、意外に少なく、七カ所しかない。傍線を引いて示した。

(一) 「浅茅が宿」で、勝四郎の生来の性格を述べていう…

勝四郎といふ男ありけり。祖父より旧しくこゝに住み。田畠あまたまづきて家豊に暮しけるが。生長て物にか、はらぬ性^{さが}より。農作をうたてき物に厭ひけるまゝに。はた家貧しくなりにけり。

(二) 「吉備津の釜」の冒頭に述べられる、妬婦論の中の一節…

夫のおのれをよく脩めて教へなば。此患おのづから避くべきものを。只かりそめなる徒ことに。女の慳しき性を募らしめて。其身の憂をもとむるにぞありける。

(三) 「吉備津の釜」で、妻の磯良が夫正太郎の「性」をよく考慮して対応していることを述べた箇所：

香央の女子磯良かしこに往きてより。夙に起。おそく臥て。常に舅姑の傍を去ず。夫が性をはかりて。心を尽くして仕へければ。井沢夫婦は孝節を感たしとて歎びに耐ねば。正太郎も其志に愛て。むつまじくかたらひけり。

(四) 「吉備津の釜」正太郎の性分を評したのもの：

されどおのがまゝ、の姦たる性はいかにせん。いつの比より軈の津の袖といふ妓女にふかくなじみて。遂に贖ひ出し。

(五) 「蛇性の姪」で、当麻の酒人が豊雄に、真女子の正体が蛇であることを告げた：

此邪神は年経たる蛇なり。かれが性は淫なる物にて。牛と孳みては麟を生み。馬とあひては龍馬を生む

(六) 「青頭巾」中に、快庵禪師が、鬼や異類に化けた女の例を述べたもの：

凡そ女の性の慳しきには。さる浅ましき鬼にも化するなり。

(七) 「青頭巾」で、同じく快庵禪師が食人鬼になった阿闍梨の「性」を推測して言ったもの：

あはれよき法師なるべきものを。一たび愛慾の迷路に入て。無明の業火の熾なるより鬼と化したるも。ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし。

明らかに、男と女の性が区別されている。勝四郎は「物にか、はらぬ性」、正太郎は「姦たる性」、鬼僧は「直くたくましき性」である。「姦たる」正太郎は、いかにも問題を引き起こしそうな「性」である。しかし、他の二つ

の「物にか、はらぬ性」は気性のさっぱりした、人好きのするような人柄を想像させる。鬼僧の「性」に至っては、それほどの剛毅な性が、何故鬼僧と至らしめたのが気になるところである。これらが男の「性」であるが、女の「性」は様相を一変する。真女子は「姪なる性」であるという。これは女というよりも、異類だからという説明もつくかとは思ふ。しかしながら、所謂一般的に女というものは「慳しき性」を持つているという論が「吉備津の釜」のみならず「青頭巾」にも示されている。多く指摘されているところであるが、同じ鬼になるにしても、男の性は「直くたくまし」いからであり、対して女の性は「慳し」、救い難いものであると、秋成は論じているのである。

このように、「性」という言葉は、個人特有の性格だけにとどまらない。確かに、右に記した「物にか、はらぬ性」「姪たる性」などは、勝四郎や正太郎に特徴付けられた性格である。勝四郎の「性」はあくまでも「物にか、はらぬ性」であり、「姪たる性」とはならない。正太郎も又しかりである。何故なら、物語は、その彼らの「性」を契機として展開していくから。彼らの身の上で起こった出来事は悲劇は、彼らの「性」によって否応なしに引き起こされていったものである。しかし本人達は、自分の身に降りかかる悲壮な思いや惨劇は、自らが選択していることとは気づいていない。気が付いているのは読者だけである。それは、語り手が、導入部で彼らの「性」を宣告することで、読者は自然と彼ら、彼女ら各々の「性」を念頭に置く。それが故に、彼ら、彼女らが事件に身を投じることになったと解しながら読み進めていくのである。つまり個々に異なっている、「性」は個人の意志によって制御できない気質であり、また男一般、女一般に通有する性格として繋がってゆく気質ともいえる。

二

ここで、先に挙げた「性」のうち、「姪たる性」と「慳しき性」に注目したい。何故なら、先にみた「性」の表

現の中で、男性の「性」の表現のうち、唯一救いのない負の表現をされている。また、「慳かたましき性」は女の「性」の一般的特徴だとして、「吉備津の釜」と「青頭巾」二つの作品に述べられている。さらに、特筆すべき点は、どちらの「性」も漢字に振られているルビが、当該漢字の読みではないことである。次に「吉備津の釜」に使われている「奸たはげたる性」「慳かたましき性」、それぞれの意味を検討してみる。

「奸たはげたる性」は正太郎の「性」を評したものである。「奸」という漢字は本来、「男女の関係が正しくない、みだら」という意味である。まさしく妻の磯良を捨てて妓女の袖と駆け落ちをした正太郎の状況を指していると言える。妻の磯良は、正太郎の「性」をはからいながら、甲斐甲斐しく尽くしているにかかわらず、彼の「奸たはげたる性」はその妻を捨て、妓女の袖と一緒にいることに何の罪悪感も抱かないでいるのだ。

また、振られているルビの「たわけ」という意味には、「ふざけること、ふざけた言動」という意味以外に、「姦淫すること、禁忌にふれるような性行為」という意味もあり、「たわけ」という意味も正太郎の言動に一致する。

しかしながら先に述べたように、「奸」という漢字は、ルビの「たはげし」とは読まず「みだら」または「かだまし」とも読む。意味は「悪賢くて誠意がない」である。ここで、「奸」の漢字の意味と「かだまし」という意味が離れていることに気づく。「奸」は本来「男女のみだらな関係」を示す。しかし「かだまし」はそのような意味は持たない。秋成はその「かだまし」という特徴を正太郎の「性」としてあらわすことを削除し、「たわけし」という意味を重ねるといふ、特徴付けを行った。つまり、正太郎の「性」は「男女関係のみだらであり、禁忌にふれる行為に及んでしまう性」であることをあらわすべく、「奸」に最も近い意味をもつ「たわけ」というルビを振ったのではなからうか。これはなぜであろう。

恐らく、漢字を示すことで、視覚からの印象という効果、そして「たはげ」という和語のルビを振ることで、日

本人が「たはけ」から自然と思ひ浮かべることの効果、視覚と音という双方の効果をねらったのではないかと思われる。

次に、「かだまし（奸し）」という「悪賢くて誠意がない」性は、「慳しき性」と表現し、磯良の「性」ひいては「女性」の「性」として意味付けた。「慳」という漢字も「奸たる性」での表現と同じように、本来は「かだまし」と読むわけではない。「おしむ」と読み、「けちで物惜しみをする」という意味である。「慳しき性」も視覚と音の双方の効果を意識している様子である。ところが、先の「奸たる性」と違って、この「慳しき性」は磯良の言動と重ね合わせたとき、どのように読み解いたら良いのが、戸惑うところである。彼女の何をもって「悪賢くて誠意がない」というのだろうか、また「けちで物惜しみをする」というのか。その手がかりをつかむために、まず「慳しき性」がはじめに登場する起筆部分の妬婦論を見てみよう。

三

妬婦⁽¹⁾の養ひがたきも。老ての後其功を知ると。咨これ何人の語ぞや。害ひの甚しからぬも商工を妨げ物を破りて。垣の隣の口をふせぎがたく。害ひの大なるにおよびては。家⁽²⁾を失ひ国をほろぼして。天が下に笑を伝ふ。いにしへより此毒にあたる人幾許といふ事をしらず。死⁽⁴⁾て蟒となり。或は霹靂を震ふて怨を報ふ類は。其肉を醃⁽⁶⁾にするとも飽べからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく脩めて教へなば。此患おのづから避べきものを。只かりそめる徒ことに。女の慳しき性を募らしめて。其身の憂をもとむるにぞありける。禽⁽⁷⁾を制するは氣にあり。婦を制するは其夫の雄、しきにありといふは。現にさることぞかし。

この妬婦論の論点は「只かりそめなる徒ことに。女の慳しき性を募らしめて。其身の憂をもとむるにぞありける。」の一文に集約される。つまり、男性は軽い気持ちのちょっとした浮気が、女性特有の「慳（かだま）しき性」を募らせてしまい、その結果は、夫自らその身に憂いや災いを招く、と説いているのだ。どうやら「慳（かだま）しき性」というのは、女性の嫉妬心と大きく関係する「性」のようである。

この妬婦論の表現は、主に『五雜俎』巻八人部四から引用したり、その内容を念頭に置いて書かれている。典拠とともに、妬婦論の意図を探ってみる。直接文言を引用した部分だけでなく、下地として引かれている部分とともに傍線を引いた。

(1)「妬婦の養ひがたきも。老ての後其功を知ると。」は、妬婦は老いてからその功績がわかる、と述べた一文から取られている。

人有为妒妇解嘲者曰：「士君子情欲无节，得一严妇约束之，亦动心忍性之一端也，故谚有曰：『到老方知妒妇功。』」坐客不能难也。

（嫉妬深い婦人のために、あざけりを弁解する人がいた。「士君子も情欲には節がないが、一人の厳格な婦人を見出して、監督させると、心を動かし性を忍ぶ一端となる。だから、老いに到って方に妬婦の功を知る、というのだ」というので、一座の人たちは、これを論難することができなかった。）

(2)「家を失ひ国をほろぼして」は、名妓というものは人を惑わせる程度が甚だしいことを、歴代の太子や権力者の例を挙げて論じている箇所からの引用である。

名伎之惑人，丧家亡身者多矣。婢妾则原碧乱王，櫻桃惑石。……贤智之人不能自克，何也？至于迷惑伉俪以殒其軀，若长卿之于文君，荀彧之于曹氏，抑又罕矣。

（名妓は人を惑わせるものであつて、家を賤い、身を亡ぼす例が多いのである。婢や妾では原碧が王莽を迷わせ、櫻桃が石虎を惑わせた。……賢知の人もよく自制することができないのは、何故であろうか。美女の愛に溺れてその身を滅ぼすに至るのであつて、司馬相如の卓文君における、荀粲の曹氏におけるごときは、そもそもまれであろう。）

ここで注意したいのは、引用されていないが、後半「……」部分の「賢智之人不能自克、何也？至于迷惑伉俪以殞其軀」という箇所である。賢くて知恵のある人々でさえ名妓の色香に勝つことはできず、自制できないまま愛欲に溺れ、身を亡ぼすことを述べている。この箇所の注目すべき理由は後に述べる。

(3) 「いにしへより此毒にあたる人幾許といふ事をしらず」は、次の箇所を下地にしている。典拠文では、この文言は、後に続く妬婦を羅列するための、導入句である。

古今妬婦充棟不胜书也。今略记于左：

（古今の妬婦は実に数多くいて、一々書きしるすことができないほどであるが、いま左に略記することにする。）

これ以後、六十人ほどの妬婦の事象が紹介されていく。その中の三例ほどを、秋成は引用しており、(4)～(6)として左に取り上げる。

(4) 「死て蟒となり」は、

梁郗氏之死为巨蟒（梁の郗氏は死して蟒となり）

(5) 「霹靂を震ふて怨を報ふ類は」は、

蜀功臣家富声伎，妻在不_レ敢属目；妻死之后方_レ欲召幸，大_レ声霹靂起于床簧，惊_レ怖得病，竟_レ殞其軀。

(蜀の功臣の家には歌い女が沢山いたが、妻の存命中は決して目を向けなかった。妻が亡くなってから、はじめてよびよせて寵愛しようとする、ベッドの敷板のところから、大きな雷鳴がとどろいたので、驚きと怖れのあまり病気になる、ついに死んでしまった。)

(6)「其肉を醢するとも飽べからず」は、

故治妒者、轻则当宋明帝之于刘休妻、决杖二十、赐妾别处；重则我太祖之于常遇春妻、涸醢其肉、以赐群臣。(であるから、嫉妬を治すのは、軽ければ、宋の明帝が劉休の妻に対してとった処置、即ち杖叩き二十のうえ、妾を賜って別のところに住まわせるというようなことを当然すべきであり、重ければわが太祖が常遇春の妻に対してとった処置、つまりその肉を酢漬けや塩漬けにして、群臣に賜る、というようなことをすべきである。)

そうして、挙げたこれらの例に対し、秋成は続けて、「さるためしは希なり」と、このようなひどい例は滅多にないとしている。しかし、当の『五雜俎』では、(6)の典拠文に続けて、秋成の言葉とは反対の意見を唱える。

使天之于妒妇皆知王延翰之妻也、然亦不胜其雷矣。使君之于妒妇皆知常开平之妻也、然而不胜其醢矣。使佛之于妒妇皆如梁武帝之郗氏也、然而不胜其忤矣。

(もし天の妬婦に対する処置を、閩の王延翰の妻にしたようにするならば、雷がいくらあっても足りないだろう。もし天子の妬婦に対する処置を、全て常開平の妻にしたようにするならば、いくら塩漬けにしても足りないだろう。もし仏の妬婦に対する処置を、全て梁の武帝の郗氏にしたようにするならば、いくら懺悔しても足りはしないだろう。)

右の文句は妬婦への対処方法を、四名の処罰を受けた妬婦の例を挙げつつも、結局はこれらの対処をいくらやって

も切りがない。それ程妬婦は多いのだということを行っている。その四例の内、二例はまさしく秋成が引用した(4)と(6)の妬婦の例である。これは秋成が六十の妬婦の例から選んだのが、偶然この箇所でも取り上げられていたというわけではないであろう。更に、秋成が取り上げた例ではないものの、閩王延の妻は、最期には身を雷に碎かれたという。まさに、(5)の例が雷を取り上げていることに注意した時に、秋成が上の文を執筆する際に、この段落が意識にあった、といえるのではないだろうか。

「さるためしは希なり。」といっても、その前には、嫉妬深い女の害はさほどひどくなくとも「商工を妨げ物を破りて。垣の隣の口をふせぎがた」い程の障りは生じると述べる。町人からすれば生活の糧を得る家業に差し障りがあるということは、十分に生き死にに關わる障りである。この五雜俎の典拠内容を知っている者ならば、恐らく字義どおり、「希なり」とは読まないであろう。

四

(7)「禽を制するは氣にあり。婦を制するは其夫の雄、しきにありといふは」は、鳥類を気合いで制するという原理を引き合いに出し、婦人に嫉妬を起させないように制御するための方策は、男性自身が気性をしっかりと持つことにあると論じている。この箇所は、次の典拠による。

昔人云：「禽之制在氣。」然則婦之制夫固有出于勇力之外者矣。

(昔の人は「鳥類を制するものは、氣にある」という。とするなら、婦人を制するのは、夫が本来持っている勇力の外に出るものである。)

この引用意図は、秋成が主張したい持論——「夫のおのれをよく脩めて教へなば。此患おのづから避べきものを」——を、中国典籍から引用することで理論的補強を行うことにあるだろう。つまり、日本のみならず古今東西見ても、その主張に理があることを意義づけることができる、と考えたのではないだろうか。

また、この言葉が『五雜俎』の典拠にはないことから、中村博保氏は「吉備津の釜」で起こりうる事柄を提示する、呼び水の役割をもっているとする。

原文にはない強い筆勢をはらんで記されている。叙述は一転して、「さるためしは希」であり、「女の慳しき性を募らしめ」「此患」を招くは、むしろ「夫のおのれをよく脩めて教へ」なかつたことに原因があると説く。つまり女性一般に内在する嫉妬の悪を誘発するものは男性の側のあり方であると説いており、原文にはない「其の夫の雄々しさ」という言葉が示されている。⁽⁵⁾

ここで、「夫のおのれをよく脩めて教へなば。」ということが、「事件をあらかじめ予告するもの」として、「夫のおのれをよく脩め」た肯定的に展開する話なのか、それとも「よく脩め」られなかつた否定的な展開が待っているのかは、中村氏は述べていない。そこを田中厚一氏は、この文言が「吉備津の釜」の重要なテーマの一つであると説くと共に、否定的な展開の宣言だと称える。

語り手のこの部分で中心的なテーマは妬婦の害はやっかいなものであるけれども、それらはすべて夫の雄々しさで回避できる、という点にあった。傍線④（禽を制するは雄々しきにあり）を指す筆者注）は同じく「五雜俎」巻八にその典拠がみられるわけで傍線④（夫のおのれをくもとむにぞありける）を指す筆者注）はいわば典拠に裏うちされた語り手の確固たる信念であり、何故に語り手がこのようなことを語らねばならぬのかを示したものであった。……物語の中心的な問題意識を、語り手は「夫の雄々しさ」においていたのであ

り、従ってそれとは正反対の正太郎という人物がまきおこす物語との比較のためにこの話を把握していたことになる。⁽⁶⁾

田中氏は、「夫の雄々しさ」とは「正反対」の正太郎の「奸たる性」を際立たせるための視点であり、その問題意識を正面から物語の主旋律とするのではなく、正反対の人物を主旋律にもつことで「正太郎という人物が巻きおこす物語との比較」をしながら、その上で物語を展開し、問題意識を強調していると、物語の構成手法を分析する。

結論を見れば、田中氏のいう物語の手法は理解できる。しかしながら、読者は物語が始まって間もなく、正太郎の性を評して、「おのがままの奸たる性はいかにせん」と述べられたとしても、やはり正太郎が「夫の雄々しさ」で、その「おのがままの奸たる性」を制することを期待しながら読み進めるのではないだろうか。そうして物語の最期には、おのがままの性を制することができなかつたが故の、悲惨な結果を目の当たりにするのである。妬婦を甘く見て、おのがままの性を制御せずに放逸したままにしておく、結果、自分の破滅へと自らを追い込むことになる、凄惨な表現で読者の眼前に提示する。本来磯良は働き者で、舅姑の世話に甲斐甲斐しく行い、夫の気嫌を損ねることなく心を尽して嫁業を勤めた。その様は、誰もが満足するものだった彼女を妻として、正太郎も愛でる程であった。彼女に落ち度がないだけに、正太郎が「雄々しさ」を持って制御しなければいけないのは、妬婦でなく、「いかにせん」と飽きられている「おのがままの奸たる性」であることが明白となる展開となっている。

五

しかしながら、『五雑俎』に通じているものであれば、秋成の「確固たる信念」である「夫のおのれをよく脩

め」られるとは、考えないであろう。また、そこを秋成も見計らっていたのではないだろうか。何故なら、秋成が「吉備津の釜」で典拠とした『五雜俎』巻八人部四において述べられていることは、ほぼ夫が妬婦に悩まされ、美女や名妓に翻弄されている事に対する、嘲りを通り越した、嘆きの羅列だからである。

例えば、典拠である「昔人云：「禽之制在气。」然则妇之制夫固有出于勇力之外者矣」のすぐ前には、以下の文が述べられている。

宋时妒妇差少，由其道家法谨严所致，至国朝则不胜书矣。其猥琐者无论，吾独叹王文成伯安内谈性命，外树勋猷；戚大将军元敬南平北讨，威震夷夏，汪少司马伯玉锦心绣口，旗鼓中原，而令不行于闾内，胆常落于女戎，甘心以百炼之刚化作绕指也，亦可怪矣。昔人云……。

(宋の時代には妬婦がやや少なかったが、これは道学の家法の謹厳さのいたすところによるものであった。しかし、わが朝に至ると、一々書きあげられないほどある。その猥らでいやらしいことは無論のことであるが、ただ嘆かわしいのは、王文成伯が内には性命を淡じ、外に勲功を樹立し、大將軍の威元敬が北に南に討伐して平定し、威は国内はもとより夷狄にも震い、少司馬の汪伯玉は思想にも文学にもすぐれ、中原で軍功をあげたにもかかわらず、これらの人の威令は閨房では行われず、肝玉は常に女軍の中に捕らわれてしまい、女に心をとろけさせられて、百戦錬磨の鉄の鋼さをもちながら、指にまといつくような軟弱な人と化してしまった。誠に怪しむべきことである。昔の人が言うには……)

どんな勇者であっても、美女の前ではその勇者たる雄々しい姿はどこへやら、すっかり骨抜きになってしまう、という論である。このような前文の後に、「婦之制夫固有出于勇力之外者矣」という言葉が登場しても、この言葉

は宙に浮いたままである。理論的に正しくとも、実際は遂行不可能であることを、前文がすでに論じてしまっている。どんなに勇猛果敢で、機を見るに敏である大將軍の威元敬（他段に威元敬が妬婦の害を最小限に抑えた事に對し人々が、威將軍は能く変に對応された（「威將軍能處変也。」）と言ったことが述べられている）や少司馬の汪伯玉でさえ、閨房では彼らは威力のある命令など、行える筈もないのである。

また、前に「~~~~~」で示した一文、「賢智之人不能自克、何也？至于迷惑伉儷以殞其軀」はさらに、名妓が人を惑わせることを述べている。中国のどんな賢知な人物であれ、自制ができず、美女の愛に溺れてその身を滅ぼすに至る、名妓の前には自制が効かない。ましてや正太郎のような勇猛でもなく、賢人でもない者が、妓女に惑わされないはずがない。

つまり、秋成がどんなにもっともらしく「妇之制夫固有出于勇力之外者矣」という言葉で男の力を鼓舞しようとしても、美女や妓女が登場すれば、男性は必ずなびき、惑わされるものだということが、当時の読者であれば当然の認識としてあった。それ故、秋成は中国典籍から、その当然の見方に相対する文言を引いてきたのではなからうか。

確かに、この妬婦論は「その時代なみの平凡な意見を示したものにすぎない⁽⁷⁾」のであろう。そうであつても、やはり『五雜俎』というから辞句や事例を引き、当時一般の意識に重ねて語りかけることに、意味があつたのではないかと筆者は考える。秋成は『五雜俎』という中国の雑文を引用することで、女性の「性」は本来罪深い性であり、その罪深さから鬼に変貌するという、仏教的な考え方を払拭したかったのではないだろうか。このことについては後述する。

六

しかしながら、依然として「慳(かだま)しき性」を表現したものが、磯良という女性であることに、どうしても理解しがたいところがある。彼女が鬼になったことは、「慳(かだま)しき性」から嫉妬を募らせたからだというが、もし、男性なら誠心誠意の気持ちで踏みこじられた時に、平気でいられるというのであろうか。長島氏はこの設定と描写に違和感を覚え、左記のように述べている。少々長いが以下に引用する。

だが、磯良の方は、冒頭の妬婦論に当てはまるような、嫉妬深い女であったのかどうか。正太郎が父親に監禁された折、語り手は「磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に実やかに、かつ袖が方へも私に物を餉りて、信のかぎりをぞつくしける」という。拘禁された夫に代わり、自らの感情を殺して妾の窮状を救っているわけである。それに対し正太郎は、悔悛したと見せかけ、磯良に嫁入り道具を売らせて金を整えさせ、袖とともに駆け落ちするという、手ひどい裏切りを犯す。磯良が病に臥し、生霊になったのは、嫉妬のためではない。磯良を鬼に変貌させたものは、忍従を重ねて示した誠意を、無残にも踏みにじられた怨みである。事はすでに焼餅や、愛情のもつれといった、男と女という次元の問題ではない。人間性を踏みにじられた屈辱的な裏切り。正太郎は、夫として妻を裏切ったという以前に、人間として磯良を裏切っている。この間の事情は、磯良の忍従を多としながら事件の成り行きを述べている当の語り手にも、もちろんわかっているはずである。にもかかわらず語り手は、冒頭に妬婦論を配することにより、磯良の憤死と復習を、妾に夫を奪われた女の嫉妬による所業として、類型化しようとする。⁽⁸⁾

この「慳^{かだま}しき性」の意味として、「心のねじけたこと」「恪気深い」「嫉妬深い」という意味を『評釈』は示す。⁽⁹⁾

しかしながら、長島氏が説くように、磯良の「性は」「心のねじけた」「憎気深い」「嫉妬深い」とは簡単に背首し難いのである。磯良が最後に、裏切られた恨みから鬼となって、正太郎を連れ去ったのは、正太郎が一心に尽くす磯良に対し、一度ならず何度も裏切り行為を続けたからである、という磯良への弁護はいくらでも思いつく。そして、このような思いをもつ研究者も少なくはないようだ。

女性本来が持っているという、「慳^{かだま}しき性」を磯良が露わにした原因は、正太郎にある。つまり正太郎の「奸^{くさげ}たる性」によって、その「慳^{かだま}しき性」が表面化してきたのだ。

語り手の語り方は、正太郎の「奸けたる性」によって、女の「慳しき性」が表出してしまおうという見方の上になりたっていたわけであり（正太郎がどのように雄々しさを回復していくのか、又できないのか）、その意味で語り手の視点の中心は常に正太郎にあった。……それは正太郎がどうなるのか、彼の「雄々しさ」と「奸けたる性」の行く末に、その焦点が絞られていく、ということなのである。⁽¹⁰⁾

磯良はいわば死を契機として、本来の「性」にかえった。肉体を離れ「性の本然」にかえった磯良は、その本来の性が求めるままに「鬼」・「もののけ」として現形する。作者秋成は、女性を悪とする説話の思想とは別な意味で、女性の中に「もののけ」の本質を見ていたようである。女性の中に魔性の性を見出す、或いは女性に変体の可能性を見出す考え方は、『諸道聴耳世間猿』卷之一「貧乏は神どまり在す裏かし家」で、神主の妻おふゆに、既にその胚胎が見られる。⁽¹¹⁾ そうしてこの物語は、説話的なおもかげを残しながら、人間の「性」の追求、或いは「性」と現実のドラマという、小説的な主題を持つ物語に発展させられているのである。

妬婦論の中で直接引用している文言「古今妬婦充棟不胜书也」の前には、「妇人女子之性」として、事細かに具

体的にその性質を述べていて、非常に興味深い。以下に紹介する。

夫子謂「女子小人为难养」，《书》称「紂用妇言」《诗》称「哲妇倾城」。凡妇人女子之性，无一佳者，妒也，吝也，拗也，拗也，懒也，拙也，愚也，酷也，易怒也，多疑也，轻信也，琐屑也，忌讳也，好鬼也，溺爱也，而其中妒为最甚。故妇人一不妒，足以掩百拙。古今妒妇充栋不胜书也。

（孔子は「女子と小人は養い難し」といい、『書経』には「紂、婦の言を用う」といい、『詩経』には「哲婦、城を傾く」とある。およそ婦人女子の性は、一つとして佳いものはない。やきもちを焼き、物惜しみをし、ひねくれており、怠け者であり、つたなく、愚かであり、残酷であり、怒りやすく、疑い深く、軽々しくものを信じ、くだくだしく細かく、何かと忌み避けることをし、迷信を好み、愛に溺れる。しかもその中で、嫉妬が最も甚だしい。そうであるから、婦人がもし少しでも嫉妬しないならば、百の拙い点を覆い隠すことができるのである。古今の妬婦は一々書き記すことができないほどである。）

「女子之性，无一佳者」と述べる性質の始めに、確かに「妒（やきもちを焼く）」、「吝（物惜しみをする）」、「拗（ひねくれる）」という性質が挙げられている。つまり、先にのべた『評釈』が示す「慳（かだま）しい性」の意味と、全く重なるのである。「心のねじけたこと」は「拗」に、「愠気深い」は「吝」に、「嫉妬深い」は「妒」である。秋成がこの箇所を目にしなかったはずはない。その際に、女のこれらの性を募らしめているのは、「女子之性，无一佳者」と感嘆している男性側にあると、思ったのではないだろうか。

そして「慳（かだま）しき性」というのは、字義通り見てみると、引用箇所のいくつかの性質を、併せ持った表現だと言うことがわかる。「慳」本来の漢字の意味は、「けちで物惜しみをする」という意味であるから、「吝」に当たる。しかし、ルビの「かだましい」はそう簡単にはいかない。漢字では「姦」であり「邪悪、奸佞、利己的

ある」という意味であるから「悪賢くて、身勝手である」という意味になるのだが、「吝」のように、一致するものがない。「拗」「酷」「懶」「多疑」の性質が相合わさって表現される行動だといえるだろうか。

七

先に述べたように、「性」の表現に、秋成は漢字の選出を入念に行っていると思われる。和語で「たはけた性」とすれば済むところを、「奸」という漢字を用い、「姪」「奸」等の意味を連想させ、「戯」という漢字を連想させないように図っている。「慳しき性」に「かだましき」とルビを振っているのも同じことであろう。「慳」からの視覚的な連想を図っている、と筆者はみている。しかしながら、「かだましい」という「悪賢くて、誠意がない」という意味に「慳」の漢字の「もの惜しみをする」という意味を重ねたのであろうか、という疑問が起こる。磯良の立ち振る舞いを考えるとき、「もの惜しみをする」という意味は、相応しくないように思われるからである。また、「もの惜しみをする」意味ならば、「吝」の漢字を用いる方がよほど相応しい。「吝」なら「もの惜しみをする」イメージは簡単に湧いてくる。また、それは、『五雑俎』の作品にも提示されていたことは、前述している。しかし、秋成はあえて「慳」という漢字を用いた。果たして「慳」字から、その意味を連想する効果は、如何ほどだろうか。とはいえ、秋成はこの「慳」字でなければならぬ意図があったはずである。

ここで、「慳」の意味から離れてみよう。「慳」の漢字の成り立ちに目を転じてみたい。不思議に思うのが、女性一般の「性」というにも関わらず、秋成は「女偏」の漢字ではなく、「立心偏」という「心」に関係する漢字を用いているのである。「慳」の成り立ちは「心+堅」。音の「ケン・カン」は「堅」の意味である。つまり元々意味するのは「心を堅くする」様。転じて「おしむ」という意味を表すことになったようだ。¹²⁾そこで今まで「慳」を

「おしむ」から考えていたが、その原型である「心を堅くする」として磯良の行動や心情を考えてみたら如何だろう。『雨月物語』中で、磯良ほど頑なに周囲の思い、当時のあるべき女性像を行動規範として、振る舞ってきた女性はいないのではないだろうか? 「生まれだち秀麗にて。父母にもよく仕へ。かつ歌をよみ。箏に工みなり。従来かの家は吉備の鴨別が裔にて家系も正しければ。」と家柄よく、眉目秀麗。芸に秀で、さらには節度を守った立ち振る舞いができる、どこに出しても恥づかしくない子女である。嫁げばさらに、朝は早くに起き、遅くまで働き、常に舅姑に仕えるという嫁であり、また夫の性に合わせて心尽くす妻の立ち振る舞い。「井沢夫婦は孝節を感じたしとて歎びに耐ねば」となるのは、最もである。長島氏が磯良を弁護して、「磯良の方は、冒頭の妬婦論に当てはまるような、嫉妬深い女であったのかどうか。…男と女という次元の問題ではない。人間性を踏みにじられた屈辱的な裏切り」である、と語気強くして擁護するように、読者は、磯良の奉仕、忍耐について、おもんばからずには読み進められない。または、磯良が砕いた心を踏みにじった正太郎に対し、怒りを感じざるにはおられないだろう。ただ、此処で立ち止まって考えてみたい。磯良とはどのような女性なのだろうか? これも多くの指摘があるように、彼女の特徴は全くないのである。何故なら、彼女の様相はまるつきり当時の良家の子女、良妻といわれるステレオタイプの女性そのものだからである。

頑なにその周囲を思い、希望で自身の立ち振る舞いを行っている彼女は、すでに彼女らしさというものがない。つまりどんなに人間性を踏みにじられても決して心を開放して感情を出すことなく、ただ「心堅くして」当時のいわゆる良妻とされる立ち振る舞いを、周囲に望むように遂行してきた。「心が堅い」ことは、執着にも繋がる。彼女が生前行ってきた行動や選択の一切は、周囲によく見られる事に執着した結果であった。

彼女は自分の本来の自然な思いを、心奥深くに堅く堅く閉じ込め、決して開放することはなかった。「人間性を

踏みにじられた屈辱的な裏切り」をされても、その悔しさや悲嘆な思いも心奥深くに沈めていた。しかし、その様々な思い―嫉妬、悔しさ、怒り等―は、心堅く奥深くに押し込められ抑圧される。閉じ込められた思いは抑圧されることで、亡くなるどころか、かえって存在を増し、恨みに変わる。しかし、磯良は生きている間は、「心堅く」、言い換えれば正しく「慳かだましく」その恨みを沈めたまま、決して人に見せることはなかったであろう。そうやって、気持ちを抑圧することで、恨みはますます強くなる。奥深く抑圧された心は、生きている間堅く閉ざされ、その堅い心は、彼女が死んでやっと、開け放たれるのである。恨みとなって。かくして、磯良はその恨みという執着から、鬼と化する。

復讐を一気に遂げず、悲嘆と恐怖をあますところなく味わわせ、猫が鼠をいたぶるようになぶり殺す磯良は、まさに「女の慳しき性」を表したものであり、いかにも女性的な復讐である、と。語り手は、袖を最初に取り殺したのも嫉妬ゆえと言いたげであり、また、自分の裏切りが、妻を悲嘆のあまり死にいたらしめるかもしれないという懸念は塵ほどもないのかかわらず、妾の病年には狂い泣く正太郎に、磯良はますます嫉妬を募らせたに相違ない、ともいいたそうな風情である。正太郎と対面する折も、その「奸たる性」に訴えかけて、美しい未亡人の話を餌に、正太郎をおびき寄せたのであった。それも、嫉妬に狂った女の「慳しき」陰湿な復讐である。⁽¹³⁾

「慳しき性」は、女性の生前には、彼女たち自身の思いを心堅くして閉じ込めさせ、周囲の望む姿で装わせる。これは、社会一般の賛美を受諾したいという執着ともいえないだろうか。何故なら、自分の「性」を堅く閉じ込めるということは、本来の「性」をないがしろにしている状態でもあるのだから。また、本心を堅く抑圧することで、その抑圧の限度を超えたときに、「吝、拗、愚、酷、易怒、多疑」等が生まれ、「かだましい性」となる。その

心の抑圧が過ぎた場合、「慳しき性」は恨みとなり、死後女性は鬼と化すことで、その心を解放させるのである。当時の女性に対する、社会的圧力を考えたときに、良き社会の一員となろうとすれば、女性の「性」は「慳しく」ならざる終えないというようにも読めないだろうか。

八

秋成は、女性の「性」を決して軽んじているわけではない。『五雑俎』が妬婦をあざ笑い、怖れ、蔑んでいる視線とは、明らかに一線を画していると筆者は見る。「吉備津の釜」は妬婦が鬼になった話であり、一見日本古来から伝えられている仏教説法と同じである。

「吉備津の釜」の話の構成から基本的な構想に至るまで、『善悪報はなし』巻五第八に収められている「女の一念来て夫の身を引そひて取てかへる事」という話が、構想の原型で有ることが指摘されている。秋成は「吉備津の釜」を日本の仏教説話と伝承的な思想の中から構想の原型を取り、物語としての形を整えたということになる。ここには、彼が仏教説話につきものの「女性の嫉妬」を主題の一つとした作品を創作する意図があり、仏教説話のプロットは、彼の考える女の「慳しき性」と男の「奸たる性」を絡ませて物語を展開して行くには、丁度よいものだったからだと思われる。しかしながら、仏教説話においては、嫉妬から鬼に変貌するその女性性は「罪深きもの」という考え方が根底となる。それは、秋成が確信している考え方とは大きく異なるものであった。そのため話のプロットとなっている、仏教説話から、女は「魔性のもの」という仏教的な因果の要素を取除かんとし、あえて『五雑俎』の文章だと解る形にし、起筆部に述べ広げていったのではないだろうか。

そこまでして仏教的要素を捨象したかったのは、秋成自身が「性」というものを、人間内部に固有するものであ

り、それは皆それぞれに自然な存在であるとして見つめ、提示したかったからに他ならない。

つまり秋成は、「吉備津の釜」という作品に、女の「性」が抑圧されていることを「慳しき性」という一言に込めて、認識させてかったのだと筆者は見ると、秋成は「男の性」と「女の性」が絡み合うことで、しばしば起こってしまう悲劇の一つを、この作品であらわした。女は往々にして社会や男の「性」によって抑圧され、「慳しき性」を募らされていく。しかし、それは女自らも「慳しき性」を募らせているにもかかわらず、気が付かないでいる。そこに女の悲劇がある。また、男の「性」が起因となり、女がその抑圧された感情や内面からの力を、男の眼前に噴出させる時、男の多くは怖れ逃げ惑う。しかし男は、考えつきもしないのである。女の鬼と化した姿は、まさしく男自らの「性」が起こさせていることを。ここに男性の悲劇があるのだ、と。

- (1) 鷗月洋『雨月物語評釈』角川書店、昭和四十四年、二二九頁。
- (2) 前注に同じ、三九三頁。
- (3) 長島弘明『秋成研究』東京大学出版社、二〇〇〇年、一七二頁。
- (4) 前注に同じ、一七一頁。
- (5) 注一に同じ、三九〇頁。
- (6) 田中厚一著『雨月物語の表現』和泉書院、二〇〇二年、六三・四頁。
- (7) 重友毅『雨月物語評釈』明治書院、一九五四年。
- (8) 注三に同じ、一六一・二頁。
- (9) 注一に同じ、三八九頁。
- (10) 注六に同じ、六五頁。
- (11) 注一に同じ、三九四頁。

(12) 鎌田正・米山寅太郎『心漢語林』大修館書店、二〇〇四年、五〇〇頁。

(13) 注八に同じ。

『雨月物語』の原文は、中村幸彦代表編『上田秋成全集 第七巻』中央公論社、一九九〇年に拠った。

『五雑俎』の原文は謝肇淪『五雑俎』上海書店出版社、二〇〇一年に拠った。

『五雑俎』の訳文は主に、岩城秀夫訳注『五雑俎 四』東洋文庫六二三、平凡社、一九九七年に拠り、部分的に筆者が加筆・削除を行った。

—なかた わかは・東洋大学法学部教授—